Heart to Heart

言葉を通じて学び、言葉を用いて考えることを大切に

清水事務局長の

ハート・トゥ・ハート vol.9

フリーダムはなぜ自由!?

1872（明治5）年に近代的な学校制度を定めた教育法令「学制」が公布されてから、本年9月で150周年を迎えました。明治維新以降に飛躍的に展開された学校教育の近代化は、明治期の日本の発展を支える大きな力となりました。明治5年という極めて早い時期に学校を基本とした教育制度が公布され、1886（明治19）年に初めて「義務教育」の文言が登場し、当初3～4年とされた就学年限は明治の終わりには6年に規定されました。

なぜ、こうした急速な教育制度が実現できたのか。それは江戸時代の武士の藩校と庶民の寺子屋の存在が大きいと思います。全国に250余りの藩がある中、藩校は1800年代にはほとんどすべての藩に設立されました。そして幕末期の欧米諸国からの外圧を契機に、国学だけでなく洋学も盛んになり、明治政府や廃藩置県によって設置された地方政府を支えた下級武士も、藩校での学びに影響され多くの知識と刺激を受けていきました。寺子屋は読み書き算盤（そろばん）を学ぶ場から始まり、1700年代後半以降の農業や手工業の発展を背景に各地で独自に展開され、庶民の学習意欲の高まりと身分制への疑問や批判も含めて改革志向を生み出していきました。

明治維新後、多くの外国語が日本に入ってきましたが、その言葉は封建制の時代には存在しなかった日本人にとっては初めての概念でした。「Freedom（フリーダム）」これをどう訳すのか。「他からの束縛を受けず、自分の思うままにふるまえること」と理解し、「自（みずか）ら由（よ）しとすること」＝「自由」という言葉を生み出した武士階級の方々と、それを「なるほど」と受け入れ日常会話に取り込み難なく使いこなしてしまった庶民層の方々の知恵と、それを可能とした藩校や寺子屋での「言葉」の積み重ねを、私は素晴らしいことだと思います。

今の時代はポジティブ、ネガティブをそのまま横文字で使う方が、積極的、消極的という言葉に訳すよりも、もっと幅広く使う人の思いを伝えられるのだと思いますが、「自由」にたどり着いたその過程も大事ではないかと考えます。

情報通信機器とディスカッション

アメリカの大学で実験した、こんな話を聴いたことがあります。4人のグループを二つ作って同じ題目でディスカッションをします。一つは情報通信機器としてスマートフォン（以下、スマホ）を使いながら議論し、もう一つはスマホ無しで議論します。スマホ有りの方は会話がはずみましたが、スマホ無しの方は今ひとつ盛り上がりに欠けたとのことでした。しかし、ディスカッション終了後に「どんな議論の内容だったか」を書いてもらったところ、スマホ無しの参加者の方が話し合われた内容について詳細に記載できていたそうです。

実験結果は何を意味しているのか。多くの情報が乱れ飛び拡散している現在、眼の前を通過していく映像や情報は脳に蓄積されることなく、瞬く間に失われてしまうのではないか。その情報を知識として留めるためには、言葉として認識し自ら考えることが必要なのではないかと思います。私は、言葉を通じて学び、言葉を用いて考えることを大切にしたいと思います。

清水秀行　連合事務局長